

創学舎ニユース

No.254

きつと、
きみは頑張れる！

大学入試ではセンター試験実施、高校入試では一月の私立入試実施と、受験シーズンに突入です。過去の体験がほとんどあてにならない、孤独でつらい日々が続きます。一ヶ月前もきつと苦しかったでしょうが、今はそれとは比較にならない苦しさを味わっていると思います。



それでも、やるべきことがきちんと把握できていて、それを確実にこなしていける人は大丈夫です。受験に限らず仕事においても、人生の様々な場面においても、「苦しさの中で、歯をくいしばってやるべきことをやる」というのが唯一の成功への道なのです。今のまま進みましょう。

さて、問題は行き詰ってしまった人達。試験会場で頭が真っ白になってしまった(次の試験がこわい)。いつも点がとれていた科目で失敗してしまった(もう自信がない。また失敗したらどうしよう)。やってもやっても伸びない(ずっと伸びないのでは...)。やるが多すぎて、とても間に合わない(もっとやっておけばよかった...)。次から次へと、マイナスの材料が増え、つらい気持ちが増幅されていきます。「がんばらなきゃ」と思って机に向かってても、なかなか集中できません。いつの間にか涙が出てきたり...。友達に話してみても、分かってくれそうにないし...。それに友達も、

自分のことできつと大変なんだろうし...

親は、何も分かっていないし...。一言一言が、無責任な発言に聞こえてきて...。学校の先生も、塾の先生も、応援してくれるのは分かるけど、いまいちだし。早く入学が決まってしまう人が羨ましい。自分も、適当なところで推薦にしておけばよかったかな...

こんなことを、四六時中考えている間に、今日という大切な日が終わります。時計を見ながら、少しだけ我に返ります。「やばい。明日こそがんばらねば...」。そして、明日が来ます。前日の夜、決意したことはもう忘れていきます。そして、また一日、いろんなことを考えて、心を痛めて終わります...。こんな日が、何日も続くともう限界です。悪いことばかり考えてしまいます。そして、「明日こそがんばろう。」という決心すらできなくなる...

こうなってしまった人。なりかけている人。大勢いると思います。でも、大丈夫です。きみは、きつと頑張れます。このニユースを読んでいる今この時が、一番きつい時間です。自分の心と向き合えないといけないのですから。でも、我慢して読み進めて下さい。

人は、苦しくなると自分が心から望んでいることを忘れてしまいます。大人でもそうです。今、苦しくてたまらないきみも同じです。とりあえず受験勉強に限れば、たまたまうまくいっていてそんなに苦しめない人もいることは確かです。でも、万人の人生についていうと、いろんな苦しい場面がいろんな分野で発生してきて人を悩ませます。何度も何度も。そういうことを経験して、必ず人は賢く、強くなっていくのです。

人は、幸せにならなければなりません。生きててよかった、がんばってよかったという

充実感を手に入れなければなりません。もちろん、今このニユースを読んでいるきみも。そのためには、自分を大事にすることです。(親も、私達も、きみの友人も、きつときみのことを応援しています。ただその気持ちの伝え方がうまくなくて、なによりきみの気持ちを全部理解することもできなくてきみの応援を十分にできないのです。)だから、きみが、自分で自分を大事にしてあげなければなりません。では、自分を大事にするにはどうすればいいの。答えは簡単です。ほんの少しの勇気を出して、自分の気持ちを見つめることです。

今、あなたが一番望んでいることは何ですか。それを思い出して下さい。志望校に合格することではないのですか。自分の力を精一杯出すことではないのですか。目標に向かって頑張る自分を取り戻すことではないのですか。今まで、やってきたものを積み上げて下さい。これだけのものを何のためにやってきたのですか。自分の夢をかなえるためにやってきたのではないのですか。毎日、泣いて愚痴を言って後悔することが、あなたがやりたかったことなのですか。あなたは、中学生生活、高校生活の最後をそうやって終わりたいのですか。

よく考えて下さい。自分がほんとうに望んでいることを忘れて幸せになることはできません。夢を大事にしないでかなえることはできません。ほんの少し勇気を出しなさい。きつときみは頑張れる。

そしてもう一つ。「もう絶対だめ」「もう間に合わない」と思っていますか。そんなことはありません。毎年、「何できみが合格するの?」という人が何人もいます。東大でも、

慶應でも、絶対無理と思われていたし、自分でもダメだと思っていた人が、合格してしまうことはよくあるのです。高校入試の場合は、浪人ができませんから、あまり大きな賭けはしない方がいいと思いますが、受けると決めたら全力を出して、残りの時間を頑張るのです。幸運というものがあるとしたら、それはそういう人の所にやってくるのです。泣いて愚痴って、自分を責めて毎日を過ごすことは、残っている可能性(命がけでやれば何とかなるはずの可能性)をも、自ら捨ててしまうことなのです。

少しだけ勇気を出しましょう。大丈夫です。きつと、きみなら頑張れる。(小林)

いじめの周辺

(傷つきやすい心)③

「人の嫌がることをしてはいけない。言うてはならない。」これは、私の母から口うるさく言われた教訓であった。祖父も、そういう考えの人間であった。いじめに遭った私には、そのことが身に沁みて感じられた。だから、その人が気にするようなことは、なるべく言わないように(絶対言わないように)と心がけて生きてきたつもりである。

でも、実際には失言することもあり、お預かりしている生徒にさえも、何回か不用意なことを言ってしまったことがある。今でも、思い出すたび胸が痛む。

勿論、自分で気付いていないだけで、もっと多くの失敗もしてしまっているはずだ。ともかく、私は「人の嫌がりそうなことは、言わ



ない、しない」と思っている。

一方で、こういう人間関係もある。「お前、最近太ったな。」「何言ってるんだ。お前には負けるよ。」「まあまあ、俺から見たら2人とも痩せてるよ。ついに俺は一〇〇キロ超えたぜ」「ちげーねえ。」そして爆笑。これは素晴らしい。こんな感じで、言いあえる関係はある意味で理想である。そして、実社会で生きていくと、こういう在り方が最も一般的であろう。しかし、同じノリで別の人に同じセリフを言うと、全く異なった反応になることもありうる。「人が気にしていることを言いやがって。無神経なやつだ。」「これはこれで、意見としては正しい。そして、こういう受け止め方をする人も、二つのタイプに分かれる。一つは、その場だけ気にするが忘れる人。もう一つは、いつまでも忘れずに気にし続ける人。女子の場合は、聞く人によっては何でもないセリフが引き金となって、拒食へとつながることも多い。

私は、世の中で少しは揉まれた。人情にもたつぷり触れた。そのおかげでいじめた級友のことも許しているし、同じ集落の人達のこととも許しているし、ひきずつていることも人並にはあるが、大分少なくなったと思う。地元に近いということもあって間接的に応援している水俣患者のことや、いくつかの冤罪裁判の当事者のことなど、知れば知るほど、どうしようもない不条理というものが存在していて、それに比べれば(こんないい方はよくないのだけれども)、自分が味わったことなど蚊に刺されたようなものだと思う。

ただ、「気にする側」の人間をたくさん知っていて、生徒の中にも少なからずいて、多数派からみたら普通のこと、普通のつつこみで

も、彼らは傷ついていることも事実である。多数派の人には、相手が傷ついていることは、きつと分らない。不登校やひきこもりやリストカットなど、これまた多数派の人には想像もつかないことであると思う。ましてや、学校において、教師が多数派である場合、ちよつとしたひとりで傷つけられている子供のことも、不登校の子供の気持ちを理解するのはかなり困難であろう。いや、親の場合さえも実はそうであったりする。そして、こういう構造は、大人の社会の中にも山ほどあるのである。

さて、「何気ないひと言」これが、「いじめ」といわれていることの第一のパターンであろう。学校のクラスであれば、何人かからイヤなことを言われる。当人たちは、何も気にしていない。毎日毎日言われるわけでもない。クラス全員から言われるわけでもない。それでも時々言われるのは確かだ。そして、いつも言われるのではないかとビクビクしている。こんな状況の子供が少なくともクラスに何人かはいるのですよ。こういう子供は、なかなか快活にはなれません。「何か、ノリが悪いよね。」とか「何かクラいよね。」と言われたりもする。そして、それは本人の耳に必ず入ってきて、また傷ついたり。(以下次号)(小林)

成人式



先日、成り行きである町の成人式に参加してきた。そこ

では、三つの町の成人六〇〇人が一ヶ所に集まって、柏や松戸に比べると小さな感じかもしれないが、厳肅な雰囲気の中で、式が執り

行われていた。自分の成人式からも 年も経ち、久しぶりに公式の式典に参加して、様々な思いが起こつてきた。

まず、ニュースなどでは騒がしい様子などが報道されるが、そのような雰囲気の人はいく一部で、大勢の人にとっては大切な儀式であるということだ。いくつかのニュースのなかでもインタビューされた何人かの新成人は「常識ある人間になりたい」と答えていた。成人式という儀式を経験することで気持ちを新たにしたいように思う。そして、新成人の装いといえば男子はスーツ、女子は振袖が多い。多くの場合それまで手塩にかけて育ててきた親御さんが準備を手助けしたところだろう。親御さんの自分の子供が成人した喜びが感じられた。私が新成人のときには考えもなかったが、今自分が親の立場に立つと、ここまで育て上げた新成人の親御さんの凄さが実感された。

誰でも時期が来れば二十歳になるものだし、役所の人々がわざわざ行う価値があるのかなという考え方もあるかもしれないが、本人たちが意識しようとしてまいと、儀式を経験するというのは大切なことだと思つた。何もなければ十九歳も、二十一歳も何も変わらない状況が続くだけかもしれない。でも儀式によって、これまでを振り返り周りの人の感謝する機会、気持ちを新たにこれからの自分に目を向け、どう生きていこうか考える機会を得られるのだ。その機会を大切にしてほしい。そんなことを考えた。

中三生や高三生は、もつすぐ卒業式がある。卒業式もとても大切な儀式である。これらの儀式に臨むとき、当事者の意識、気持ちがあ

ても大切である。先ほどの成人式の話でもあつたように、成人式で騒ぐ人、暴れる人、常識ある人間になりたいと抱負を述べる人、なんとなく式に参加している人いろいろな人がいる。参加する人の気持ち一つでその儀式の価値は変わってくる。卒業生自身はもちろん、先輩を送り出す立場の後輩たちも、卒業式を立派に執り行い厳肅な雰囲気味わってもらいたい。厳肅な雰囲気なかで、今までの自分を振り返り、親や先生、友達・・・自分を支えてくれた周りの人たちに感謝し、気持ちを新たにしたい。きつとこれからの生きるエネルギーを得られる大切なものになるだろう。(松永)



創学舎の本

受験生は読め!(合格のヒケツがココにある)

勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁 お父さんお母さんあなたの愛は子供に届いていますか (著者 小林 憲右)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他全国書店で発売中。

卒業や転校等で創学舎を離れ方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。